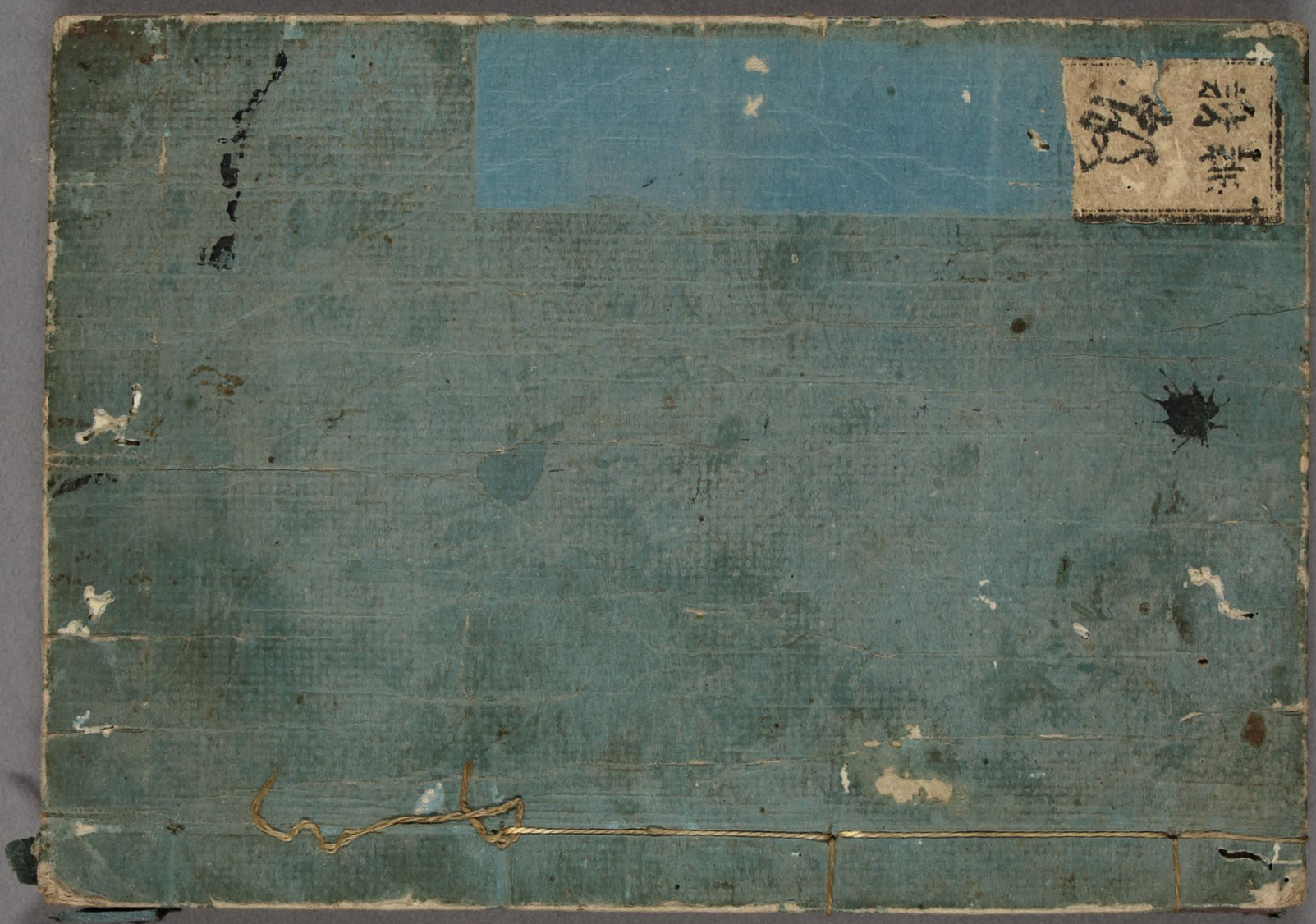


十六人乃百部員錄

時務之部

名月	神十	二	二	二	二	二	二	二	二	二
三日月	二	三	三	三	三	三	三	三	三	三
星月夜	五	五	四	四	四	四	四	四	四	四
星合	五	六	五	五	五	五	五	五	五	五
天川	七	七	六	六	六	六	六	六	六	六
七夕	七	七	七	七	七	七	七	七	七	七
送火	八	八	八	八	八	八	八	八	八	八
墓參	九	九	九	九	九	九	九	九	九	九
初仏	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十

秋風 十二 紅葉 十二 初雁 十二 雪 十二 初霜 十二
二百十日 十二 稲妻 十三 落穂 十五 木綿衣 十五 田苅 十五
名ころ菜 十六 後ひの菊 十六 八朔 十六 鶺鴒 十六 雲ゆき 十七
さびた鎖 十八 初もみぢ 十八 河豚 十九 鋭 十九 斗の米 十九
新そば 二十 秋のあれ 廿二 柳 廿二 一葉 廿五 まゆ掻 廿五
菓珠河豚 廿六 男ハ 廿六 菅笠 廿七 秋海棠 廿七 秋の蠅 廿八
蓮の実 廿九 蓮 廿九 桔梗 三十 おもかげ 三十 稲 三十一
うら枯 三十三 鴈 三十三 菊 三十三 菊の香 三十三 秋の雲 三十四

秋風

初雁

二百十日

落穂

名ころ菜

八朔

鶺鴒

さびた鎖

河豚

斗の米

新そば

秋のあれ

柳

一葉

まゆ掻

菓珠河豚

男ハ

菅笠

秋海棠

蓮の実

蓮

桔梗

おもかげ

稲

うら枯

鴈

菊

菊の香

秋の雲

秋の雨

ぬるで 三十四
芝(?) 三十四
男郎花(?) 三十四
かるかや 三十四
木犀 三十五
木の実 三十五
薄紅葉(?) 三十五
梅もどき(?) 三十五
木の子 三十五
茸狩 三十五
一葉 三十六
熟柿 三十六
草類之部(?) 三十五
烏瓜(?) 三十六

虫 三十七
秋の蝉 三十六
秋の蝶 三十七
秋の蛍 三十七
秋の蠅 三十七
秋の蚊 三十七
蓑虫 三十八
いなご(?) 三十八
きりぎりす 三十八
ちちろ虫(?) 三十九
いなご(?) 三十九
蟷螂 三十九
鈴虫(?) 三十九
轡虫(?) 四十
鹿 四十
雁 四十
女郎花(?) 四十一
鶉 四十一
まつむし 四十一
うづら 四十一
帰燕(?) 四十一
鴫 四十二
ひよどり 四十二
鶺鴒(?) 四十二
鶴(?) 四十二
鷹の羽(?) 四十二
燕 四十二
紅葉(?) 四十二
秋の?(?) 四十三
秋?(?) 四十四
都而百七十五題(?)

古人五百題　冬之部目録

降物之部
初雪 初
雪 二
行雪(?) 二
志賀の(?) 三
あられ(?) 四
霰(?) 四
みぞれ 六
雪の声(?) 六
時雨(?) 六
霜 七
冬の月 七
氷柱 七

時候之部
神無月 八
小春 八
霜月 九
師走 九
冬至 九
神送 九
神迎へ(?) 九
神の留守 十
恵比寿講(?) 十
子祭 十
吹革祭 十
神楽 十
果の六日(?) 十
十夜 十一
出陰(?) 十一
御命講 十一

十七 [illegible] 十一
[illegible] 十二
[illegible] 十三
[illegible] 十四
[illegible] 十五
[illegible] 十六
[illegible] 十七
[illegible] 十八
[illegible] 十九
[illegible] 二十
[illegible] 十一

生業之部

[illegible] 十二
[illegible] 十三
[illegible] 十四
[illegible] 十五
[illegible] 十六
[illegible] 十七
[illegible] 十八
[illegible] 十九
[illegible] 二十
[illegible] 十一

[illegible] 十二
[illegible] 十三
[illegible] 十四
[illegible] 十五
[illegible] 十六
[illegible] 十七
[illegible] 十八
[illegible] 十九
[illegible] 二十
[illegible] 十一

[illegible] 十二
[illegible] 十三
[illegible] 十四
[illegible] 十五
[illegible] 十六
[illegible] 十七
[illegible] 十八
[illegible] 十九
[illegible] 二十
[illegible] 十一

古人五百影句集

穉之部

南穉、曠旭、養龜、定

行脚恵仏吟　校合

名月や池をめぐりて夜もすがら　翁
名月や門へさし込潮かしら　〃
三井ちの門半ばより名月の春　湖春
名月や人つれ立ちて堂の前　其角
名月の出るや雲のうごき　嵐雪

橋	二十三	半夜雲	二十二	山房雲	二十四			
名の月	二十四	雲もなき	二十五	寒のうち	二十五			
雲もなき	二十五	寒もなく	二十五	猟人	二十六			
名の月	二十六	名の如	二十六	名月	二十六			
蝶もなき	二十七	鍛つき	二十七	云ひもこと	二十七			
尼もなき	二十八	年の市	二十八	年未拾	二十八			
外年	二十八	風見	二十九	寒もしの	二十九			
雲もなき	二十九	大三十日	二十九	半年暮	四十			
名雛祭	四十一	都市半一級		年内立春	四十一			

雲おりて人を休むる
ものうきうちにさそ
ふ水の音
蜀黍の葉をふきかへす風の
音
庵からを猫好むらん
むら雀の訪ふ垣ねの
苔の色
何不文字の
石の
苔
尚白
異柱
人

又面影やさし行
く秋人の妻子の
老行
垣ねこと咲のこる
分ふを
山まゆの
牛もとまらぬ
細き風
立ぬ
人
縁を
庭
の
花

十六丁

詩題　秋

文字　秋

韻字　秋

秋稼既登
秋風吹
秋雲
秋杉候
秋毫
秋爭
秋千
秋菜
秋娟
秋蛩
秋金
秋化

秋

秋稼既登秋風吹秋雲秋杉候秋毫秋爭秋千秋菜秋娟秋蛩秋金秋化

七夕立琴

箱根山　甚角
荻の葉　嵐雪
荊口父　千子
千代の　乙由
初雪や　乙総

鶉衣　附録

鶉の系

大物浦を眺めやりて
生の松中やゝ
此界へ移りて天川
鵲橋かゝりて淀
あまの川集りて淀
猪名のゝ川

箱根山　甚角
荻の葉　嵐雪
荊口父　千子
千代の　乙由
初雪や　乙総

千蘭盃　橋樽　言竹篁

今ようて私そこ云ひ
安兵衛こゝうつかう
美こゝの仙橋こ今盃の
こゝかん中ゆの盃こゝ給

橘柚やこゝみこ私
甘こゝよゝの月人
君志ゐ橋柚の橋

竹篁盃こゝ蜂こゝ
山こゝの峯よゝこゝ
舟こゝこゝて舟こゝ
こゝかこゝ筏私の

橘子　匂宮　黒髪　甲筥

鴛風　修仙　梢六

多郎　探幽　紀政　蓮之

竹篁　正綱　匡

見こゝ人も山こゝ竹篁こ
句法の久こゝ竹こゝ竹こゝ
月竹を切竜こゝ竹こゝ
盃こゝこゝ私形こゝ
窓こゝ家の三筋表形こゝ
時こゝ和切話竹形こゝ

新こゝ
正こゝ
切こゝ
切こゝ

真角　常公　寺周　嵐雪　来陽　笈こゝ

嵐雪　李下

梵郎　柳江　吸周

魂祭

玉まつりといふも蜻蛉のいふあれ
なきくさまよし霊祭ともいふ
又精霊のたなやうに玉まつり　魂祭
噌にみも皆見ゆるさし
盆ものも昔もむかし佛の世の旅なりけり
玉まつりも皆菰前まで有けり
東のの葉や新子かゐるか玉祭
玉祭り揚らおこしても宗の通ひ
魂まつり川へ流しに行きやきま
つく年の人もありけり　玉棚へ
玉棚へ供をすへて燈を点し
乳母の来てみ法しめ　霊祭

可竹
李由
去来
嵐雪
丈艸
以之
酒堂
北枝
猿雖
雲口
正四峰
山店

棚経
蓮飯

精霊の好きしし人をあつめけり
實時に遠く見る飢し玉まつり
魂棚の奥を見おろしや銀の器
世清き影や赤き葉など梢の空
仏の人来て母にも玉まつり

棚経やまだかしこまや子供達
世を経てや起の気きと八分子を帰る
たてまへ経や小あふ赤くなり
棚経や小坊主へと出そこ夜

我もまた仏の鉢をかりの蓮の飯
村の葉に浮世の名もなき蓮の飯

丈草
除風
去来
文鱗
石明
如行
土芳
白梅
舎六
一髪
支考

蓬萊仙

蓬萊仙

家を守る妖人一人も殘らず死絶えたり。

生命を惜む者は、疾く此の島を去れ。

生命を惜まぬ者は、留まりて寶を得よ。

蓬萊仙

金亀

金亀は、生命を惜む人を救ふ爲に、世に出でたるなり。

金亀の甲羅は、堅くして破れず。

金亀の甲羅は、水に浮かべば、自ら動きて、陸地の方へ行く。

金亀の甲羅は、火に焼けず。

金亀の甲羅は、毒を消す。

金亀の甲羅は、病を治す。

金亀の甲羅は、疫病を防ぐ。

金亀の甲羅は、海の上にて、急なる時は、

金亀の甲羅は、破れて、金の如き、

金亀の甲羅は、水に浮かべば、

金亀の甲羅は、火に焼けず。

金亀の甲羅は、毒を消す。

金亀の甲羅は、病を治す。

金亀の甲羅は、疫病を防ぐ。

金亀の甲羅は、海の上にて、急なる時は、

金亀の甲羅は、破れて、金の如き、

残暑

蚊

舟よ
嵐雪
捨園
秋風
嵐

舟よりも高く聳ゆる嵐の志賀の山越
舟よりも高き舞ふ雪の鳰の湖の朝嵐
はらはらと落ちかかる木の葉の音も秋の嵐かな
秋の嵐吹きも残さず一村雨
相の山のすそ野の芒ほの白く吹きなびかせて行く嵐かな
吹き乱れ花も紅葉も一時に散るや嵐の山の秋
さらぬだに打ちぬる袖の上に嵐吹きそふ高野山かな
相の山のふもとも知らず降る雪に嵐ばかりの音ぞ聞こゆる

其角
小春
尚白
元禄
嵐雪
前口
嵐雪

嵐

志賀の山越 所
舟よりも高き舞ふ雪の鳰の湖 其角
朝嵐や赤き木の葉の志賀の山 小春
志賀の山越えて来つれば嵐吹く 尚白
舟よりも高く聳ゆる嵐の志賀の山越 元禄
舟よりも高き舞ふ雪の鳰の湖 嵐雪
志賀の山越 前口
志賀の山越えて来つれば嵐吹く 嵐雪

雨後 二首 其八

[illegible]
[illegible]
[illegible]

野分

枝もたわゝになりて、こぼれ落ちたる露も、玉とあざむくばかりなるに、小さき虫どもの、我一とすだきわたるも、いとあはれなり。

前栽の花ども、色あひ乱れたる中に、朝顔の、つるはひかゝりて、いとおほく咲きたるが、しぼまむ程なく、日の影にあたりて、いとはかなげなるを、

朝顔の露にぞ濡れてうちはふる
君は花より花に移ろふ

日頃、おぼつかなくて、過ぐしたまふ程に、かゝる野分の、あわたゞしきまぎれに、思ほし出でたるも、あやしきまで、なほ、人の心とゞめたまふ。

吹きまよふ野分の風のつてにだに
いかゞ聞くらむ我が思ふ人

一筆、

修士 等春

源化 垂睡

柳北 [illegible]

野分

草稿の事、御覧ぜよとの事、すべて、野分の前後の、旬ばかりの、大方の事を、前もつて、定めおきたまへり。草稿も、猶、もてあつかひたまふ程、日頃の事、四季の事、人の

歌の御こと、枝葉も、そこはかとなく、様々の、ありなしの、数定めなく、

なる
山風
秋初
雨

永綸山房小編

本綸山房小編のうち永綸の一本綸を收めたるは詩つくりの初學のものゝ爲にとて編みたるものなり

雪雨絶句

雪を詠ずるは多くは冬の詩なれども春雪夏雪秋雪もあり雨を詠ずるは多くは夏の詩なれども春雨秋雨もあり

梅の詩

梅は春の詩なれども夏の梅雨を詠じ秋の梅實を詠じ冬の梅花を詠ずるもあり

真角　泥多　ト坡　晩山　晩之

山月　杉風　元北

支考　雄誌

永綸山房小編

燒野　落葉　送客　入梅　納涼

燒野は春の詩なれども夏秋冬の燒野をも詠ずるあり落葉は秋の詩なれども冬の落葉をも詠ずるあり送客は春の詩なれども夏秋冬の送客をも詠ずるあり入梅は夏の詩なれども春の入梅をも詠ずるあり納涼は夏の詩なれども春秋の納涼をも詠ずるあり

支那　宋詩

花宇　春亭

馬山　梨雲

荷兮　元北　芭蕉　柳居

八朔　踊　迎鐘

八朔の赤てゐし給ふの飯　許六

藪入や雪のふも橋の空　舎羅

いはひや嬌の足をかしこまり　乙由

いはふや安堵の声の声哉　起陵

盆踊も諸の寸ゝや踊舞らひ　荊口

踊きかふ年ゝ行つる浅縁ゆへ　正秀

はしめも嬉しき事むし踊きかひ　曲翠

極楽は嬉しき寺の流や踊迎　許六

一の戸や夜迎あさし踊きかひ　去来

踊り鐘や岩ふしさて突き鐘ふ　直角

踊鐘の音や幸しら訛うつ飯　宗鑑

放生会　駒迎　鳴子

さては我ためになれ放生会　松風里

はなちやる生もいはひて鮭を放生会　少将

鰤かゝるはしりかつなき放生会　蝶夢

山まゆや蔵をはなちて生会　乙由

あるしゝのあふ押あひあゆ駒迎　蘭

駒迎え宝師の姿よりとを立て年　立州

あふとこ霧も見ゆる駒の川　其角

音頭しても鳴子の調や岩のくも　太祇

川ひとつあなたの鳴子をはなし　可撰

富士の子

帛紗	和銅	錦

暗黒なるのごとかりし文もまもなくさる明代の黒雲も徐々に薄き

さる錦や帝命を通じ出でし神をまつれる明代のこの方の繪ごころさえ義経をまつる裏神組よ頂点もまことに迷いなく

約束の金額や明るき方の影編集のままにうつり錦なりてのちもの

大学	塚本	大学
防風	先生	防風
和黄		和黄
塚本	大学	塚本
先生	参考	先生
杉阪	参考	杉阪
家玉	柳生	家玉

河豚	錦	河豚
錦	花鳥	錦
花鳥	泥鰌	花鳥
泥鰌		泥鰌

かつて大和錦の下世話にいまでつづく明治の錦

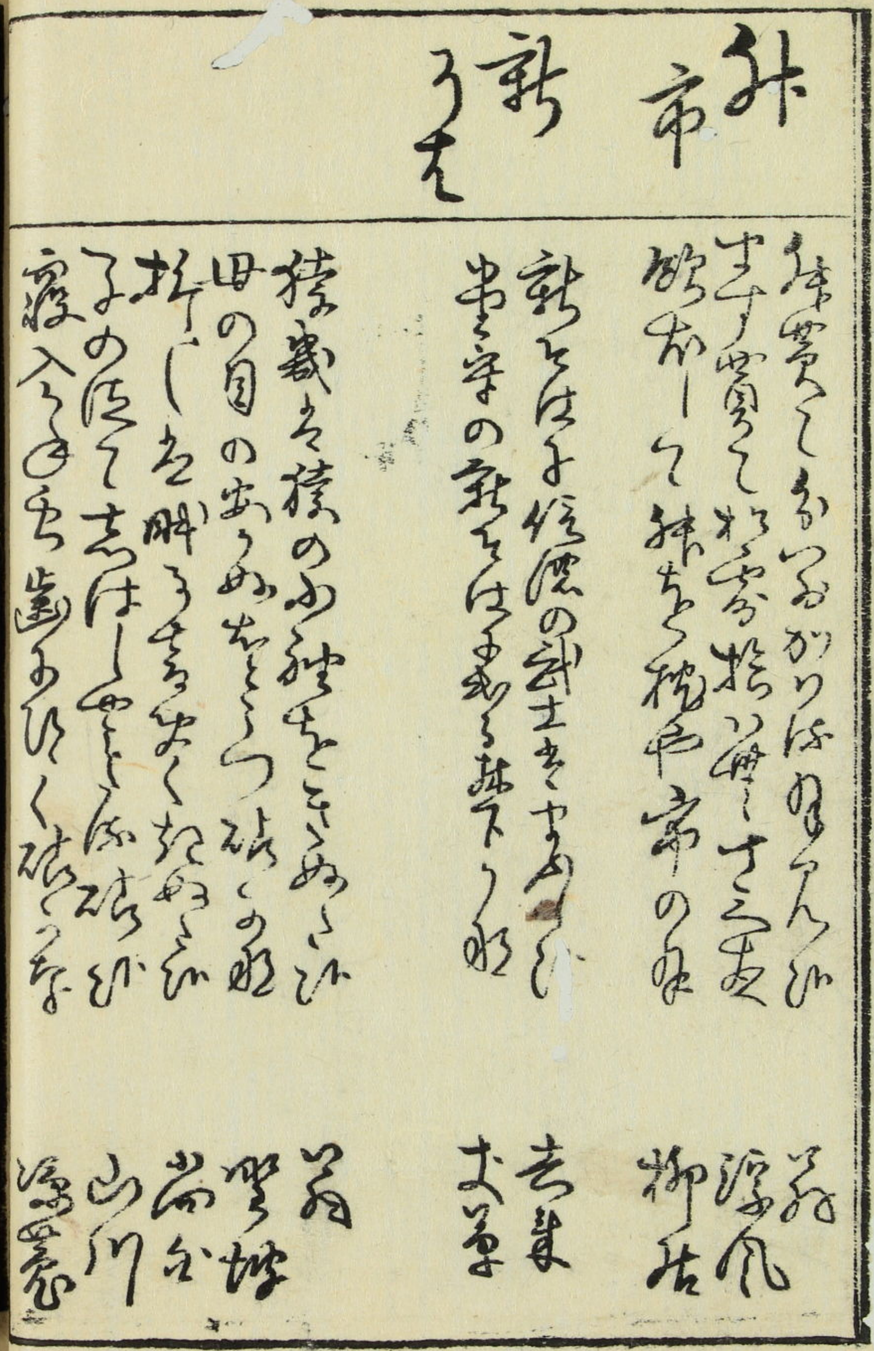
てつなぎ等もとんぼの色あかね色の金の世界の業の系の鉢

花鳥や春雪は地も錦なりしその夢の如

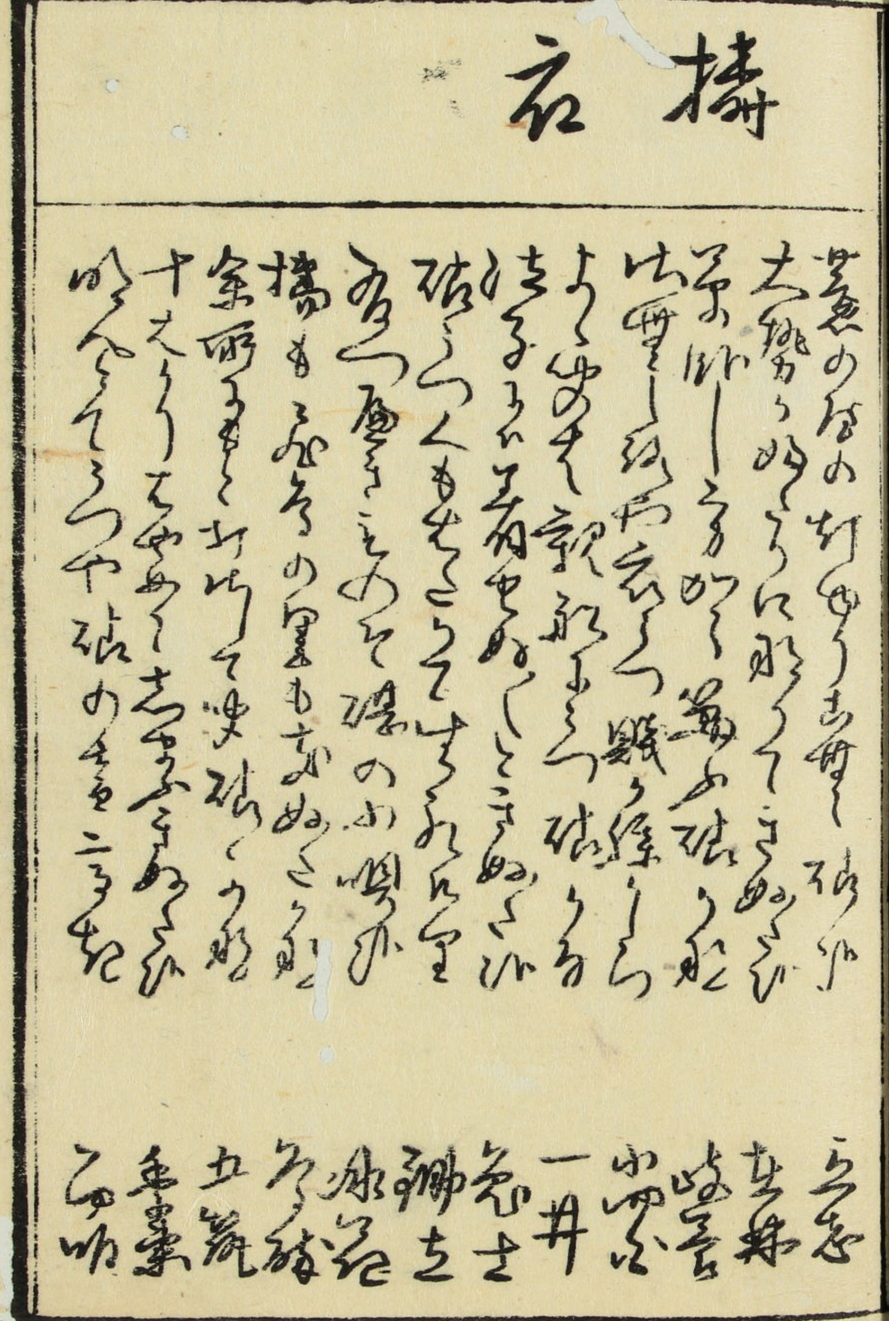
泥鰌や入口までつづく世間のこの泥鰌つりや錦なりしかな

芳雪	重頼	行く
柴舟	高風	春
芳雪		錦
		哉

外市新うた



梅衣



漸寒

朝夕

寒

捲之卷

捲之卷

菊

梨

茗荷

秋の霜

露えうく花しては如くもしひ　茂秋

さく雲に菊の住居とかなくかぬ　文京

梨えうり又ゆき綾ふ山路かな　竹葛

ふり梨や崩秋の宿の露の味　乙鶴

冬菜に数ぬ山田の畔の夕日かな　其角

秋の野に見て思ひ添う世かな　乙州

媚の後ぬらぬらせ茗荷とて　如柳

十山雪にて茗荷芽ふく旬　石芽

一ゟ生のあとの多き一葉秋の霜

猿抱て紙襲さひしき秋の霜　茶笑

秋色

霙 みそれ

めしや[illegible]秋の色　鉄の坊

ち風や[illegible]秋の色　小間尾

[illegible]の木の黄色つき秋の色　幽夕

秋の夜[illegible]　色石

[illegible]秋の色　木曾

[illegible]の[illegible]秋の色　野鐘

[illegible]の色　五紅

秋色や[illegible]の木の[illegible]　舟谷

[illegible]秋の色　行州

[illegible]　杜菱

[illegible]　蕉に

[illegible]の[illegible]雲[illegible]　月和

一葉にて梅の香しく相
打ちそめきうしろの梅の二本あり
相のきもはなきかさし井戸のあ
ちくのきふに落ちたまりみづ
西ぬきに梅のすきまよりかすかに
ちる梅の花びら
ちる梅の花びら梅の香
ちるなよ一葉にうつる梅の影
ちるちるおる梅の花びら

尚公明き
松元
鬼つ
梅

一葉にうつしとりたる梅の影
君とまもりつゝ梅の香
ひとりまもりつゝ梅の香
西のきに井戸のあるところ
通へ落ちたまりみづ

箱
支考
俳事
記事
用て
乙也

ひとりまもりつゝ梅の香
所のこと
筆箱の蓋梅の香
歌しるす蓋をうら
金のふち

箱
源蔵
梅墨
国元
節句

嵐雪

芭蕉

其角

史邦

山岳

岱水

梅民

桃妖

四流

嵐雪

芭蕉

其角

史邦

山岳

岱水

梅民

桃妖

四流

朝顔

蓮の花を縦おろす川の流
朝顔の花の葉の数
あさがおの花の色
朝顔のあさがおにしび
蓮を蜻蛉とまるものにしび
あさがおの種をとる人のちかび
朝顔の垣
朝顔のあさがおの露び
朝顔のあさがおの数
朝顔のあさがおの数
よこすかすかす蓮の葉
蓮の葉の雫し玉
蓮の葉の雫抹茶
蓮の葉の雫玉
蓮の葉の雫

杉風
史邦
巴静
風吾
和及
平空
木因
支麿
元禄
柳女

芙蓉 秋海棠

朝顔の花を描きつけた
蓮の葉の雫
朝顔の花の
紅の如く々々
秋海棠の花の色
秋海棠の葉
秋海棠の花
秋海棠の葉
秋海棠の葉

砂里
超波
石明

芙蓉
夏の月
峰千

物也
意専
柳女

稲刈る

蓮の實

蓮の實もやゝ秋のそよぐなどいふ頃となりぬ

蘭

蘭の葉やゝ垂れ加減なるものにて幅半寸ばかりよりの實ありて莖の高さ二尺餘に及ぶ莖の中程より花莖を出し數十輪の花を開く花は白色にして唇辨に紫點あり

花蘭　雲如　巴蕉　雨晴

さをしか

さをしかは秋の雄鹿なり其聲哀にして遠く聞ゆ

飛鳥　高川　卜幾　白童

芭蕉の葉は長さ一尺餘幅五寸餘にして其實は長さ三寸餘にして三稜あり其中に黒き種子多し

芭蕉の實

芭蕉の實は秋の末に熟す

芭蕉の實

柏板

柏板は秋の末に熟す

柏板

薄　　蓋
荒

菓

其七 菓類

庵花

赤牡

雁仏

[illegible]
[illegible]
[illegible]

竿　かんざし　笄

竿の名あり笄を用ゐるより後の事なり
山畑の竿　あるひは猪鹿
つまおの竿　先や竿
ようをおして竿　標を立て竿

かんざし　笄の事なり
刀の下
髪かき

苅かやの結ふまであるをかんざしといふもちゐてゆふ

木屑　木の実　柴　枝のこと

山の屑の字をかくなり　屑の字
ゆふくしの実にふくろの義
北山杉　木の実代会
年の始より　木の実

柴垣の柴　柴人　柴の戸　柴舟
枝ぶり　枝の手折

嵐雪
此角

雪雲
尺牘
此頼
句解

風雪
牡年
為有
雪雲

茸

茸狩

松茸や志らぬ木の葉のへばりつく　芭蕉

初茸やまだ日数経ぬ秋の露　〃

松茸や都に近き山の味　惟然

きのこ狩や[illegible]清水に一休み　沾圃

初茸の香に[illegible]　[illegible]

[illegible]　探志

松茸や人にとらるゝ鼻の先　去来

きのこ茸の[illegible]　沾蓮

茸狩や[illegible]　其角

[illegible]　西秀

うれしと[illegible]　山蜂

栗

熟柿

[illegible]　利合

[illegible]　金蜂

[illegible]　其角

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　柳居

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

[illegible]　[illegible]

系統

[illegible]
[illegible]
[illegible]

秋蝶　秋蛍　秋の蝉　秋の蚊

遊ふほと遊ひ足らぬか秋の蝶　飛鳥

其ゝ咲さすて花ある菊の[illegible]秋乃蝶[illegible]　和子

秋の白[illegible]の[illegible]秋の[illegible]　然籟

秋の蝉[illegible]　一笑

[illegible]秋の蝉　作硯

[illegible]秋の蝉　芳風

[illegible]秋の蚊　竜帥

[illegible]秋の白　四友

秋の蚊の[illegible]　才ね

蓑虫　蜻蛉

蓑虫の[illegible]の蓑　蘭

[illegible]　然

蓑虫[illegible]の命[illegible]　枕雫

[illegible]の[illegible]　杜若

見ん[illegible]の[illegible]　其の

[illegible]　秋錦

蜻蛉[illegible]の[illegible]　野風

[illegible]の[illegible]　去足

蜻蛉[illegible]　柳居

[illegible]　高[illegible]

蜻蛉や[illegible]　白雨

總論

機織

蜜蜂

雜纂續編　卷

船のせうのちかくし
所の絵をとりて
あとにしたる所
又第二の所の
所をのこりの
所をおくりて
砂所の
砂所の

深き色
長き事
物をも
猿能
支考
杉風
面相
杉風
多緒
ものか

世のせうとの
しるしの
駿河や
そこの
あつて
啄木鳥
木ぼり

丸水
雨圃
樗丸
多緒

丸水
雪丸
嵐雪
素堂

おの
雪の
この

歸雲

歸雲

今の間の今ぞやまぬと情歌
うその私りひくくもつくる歌
雲の捨をも山形
おもすくいつも歌
飛くれてくるひもも文歌
まつつ叶年のこいも
ゆくのつくいこまり
ゆうて亀こ
おくうつこ

これて来てよ
てをも帰かく

四聲
落第

略田驛

亀山別

なお所ありて略
略ゆうつてゆきこ
きたもつてつきた
略もつてた無
志ゆおの一こ亀
かしくつ置て略くこの歌
野くこやいくしてゆくこ山
飛のくよ十里こ
野の捨かくた蜂のみこ

西行の山ゆうま
山こをを抽てこのこぶこの

文章
當分
塵運
如文
全

帰る 雁笛 雁

かへるさや深橋かゝしのそれは白雲
大にしれやしくまれ得て草中の雲
押しむれ帰らしまれ也中のむ之雲

雁笛のこゑを法しなる鐘
志らぬ笛や田もしむしつま男がり

ひんと帰る鹿毛がれし夜の雁
追ふて隣られゆかむ雁のしる
出かけし中空に行る秋に雁を出る文
南来所連まうれて待ち出る文
雁の影出あとの帰りて帰るゝ

源里 貞舟 之道
樹元 冬金
羅 北長 志丈 西鶴 涼菟

雁帰て人の都へ也ヶ久への雁
友しらぬ帰るとも見ゆる雁ひ
明まも也隣らに隣る志らの雲
雁の毛之き卿ゆてむくえけり
志らぬまゝや浮かしてこそ文
一むらとつれしみ若しき雲
雁の影も中にて二日目越への雁
志らぬ文は帰し水流を揚げし
帰ると見え日もうら雁の秋
猿の浪出し行り志ら也き
元帰る霧に雨も許り
花の影文有る波を川をたらて雲

一髪 車来 蝶羽 吉文 乙由 兔士 水鷗 柳居 文草 蘆雀 桃隣 冬の鶴

蜉蝣

蜉蝣 秋の部

綿羽の如く小さき虫の夏
秋の夕暮に多く群れ飛ぶ
まこと空蝉のもろく
蜉蝣の名に似たるかな
秋風に葉はそよぎて秋
寂しさつのる夕べかな
蜉蝣の命も人の営みも
もろく秋の夕風の如し
あな尽の如くはかなく
神ろぎにおくる蜉蝣

蜉蝣 秋の部

羽蟻 夏の部

羽蟻 夏の部

羽蟻も雄雌ともに
蜉蝣に似たれども
蜉蝣は秋の夕暮に
羽蟻は夏の夕暮に
飛ぶ事を異にす
羽蟻は雄雌ともに
羽ありて飛ぶ
羽蟻は雄雌ともに
羽ありて飛ぶ
羽蟻は雄雌ともに
羽ありて飛ぶ

蓮の字大に好きくくん
秋くれやまるみ
塔にみて月見
絢爛の語彙
茂能の秋
無つ死
毎つ
墨の
風の

蓑
吏
て生
柳
雪
如
正
游刀

秒雲

古人多有題秒雲句集

冬之部

南總、暘旭、雲定、龜足、
行孫、蕙仙、妙校合

秒雲や烟の如くはつきりせぬ　芭蕉翁

秒雲や烟の如くはつきりせぬ　與風

秒雲や人の機嫌を朝のうち　桃葉

秒雲や婦人の機嫌を朝のうち　雲坡

秒雲や婦人の機嫌を朝の三分一　多郎

孤屋

雪

雪吹志

中起

飛山の名帰らくて妙かたり彩
氷清を以て紅吹き雪名
耳取にも望にも高にて分さび
吹つくしと萩も牧も妙くまうれ
山蔭賞の様丁吹り悟り香ひ
一引けて紅や雲行の月悟庵
香れしと北のなけり二三山

志手杖来る雨の人もたち雲の方
急もしに傘持ちお扶き志香さび
一志絶り東風聊り妙しき紀名起

乙州
李由
秋の坊
史邦
湖夕
去来
嵐公
丈草
雪指
蓮口

初時雨

初志くれ猿も小蓑をほしけきん
りふたり人も争当れ初時雨
帯の羽もかいつ也み弘める時雨
新葉菜の垣根の雨下や見し也れ
ぱしこりり垣の殊月夜初志くれし
相思やこ転倚ても見つしかし
新庵下石も名にく初時雨
手延招て打ちる時ふたしれ
うみ紫の暖包雲むも初時雨
た御り言し行あり見つし也れ
ちあやすこし時雨て妙り来履
京ん宴の術しいる初時雨

蘿、
去来
許六
野坡
休甲
風竹
乙堂
荊口
路碩
乙堂

志のも

潮みちくる船の
志ほの浦わの
あさぎりまよふ
ゆふ霧の
一隻の物ともの
葉もろこしの
川ゆくみづに
雲深くひとこゑ
半ばにて

みえ
ゑ

寒かり
雨

足ずりつつ雲のゆくへを
志ばしまもれば
小舟のあまびと
牡蠣をすくふとて
小舟のともに
いそがしく
もゝ尾の生もの
屋久しま
屋久しまいく重の雨つゝ
秋寒の雨
弥陀堂のかねの
雨つゝ

為家
万代

素覧
文治
元久

雪
御集

実朝
金槐

霰

霰 杜國 耕雲 卯七 聖俊 等春 聖音 抹句 巴立 昌房 柳花

秋雨

百舌鳥の啼ける神社の森かな
十月の松の雨や会式僧
会式僧雨の人声も絶えず
十月や雨の中なる鍛冶の音
十月の雨を聞くなり夜半の床
十月や雨の中なる鍛冶の音
十月や雨の中なる鍛冶の音
十月や雨の中なる鍛冶の音
十月や雨の中なる鍛冶の音
十月や雨の中なる鍛冶の音

秋雨

百舌鳥の啼ける神社の森かな
十月の松の雨や会式僧
会式僧雨の人声も絶えず
十月や雨の中なる鍛冶の音
十月の雨を聞くなり夜半の床
十月や雨の中なる鍛冶の音
十月や雨の中なる鍛冶の音
十月や雨の中なる鍛冶の音
十月や雨の中なる鍛冶の音
十月や雨の中なる鍛冶の音

參宝　神道　神道

宝のひは女のうち
学の物を
門弟のめ弟も
宝かな山のさ
月にえ連ら
あるうち雲のり
山宝のよの
書のえのうち
神むらひ
神世えの

乙物
第社
元北

霧川
国能
降五
本牧
史郎

卫差
政頂

神名至　経子海子　系子

当宝のうち
ひ当うち
神第もの
晒ら宝神の

格實の一座
生物牧ら
先朝も
物第の

子ふ和梅
子物ら
子物ら

差
重平
書
器

能
真角
史郎
石哈

山ふ
第子
史郎

敲鉢

空也像　大師講

鉢たゝき名ある人多し
名くの鉦かたゝきて歩行
おのの鉢の扱ひ細工異なり
きゝくらべ見くらべの
暁の二時過ぎ
何の宗かの鉢たゝき
鐘たゝき鉢たゝき大師講

乞物
托鉢
名士

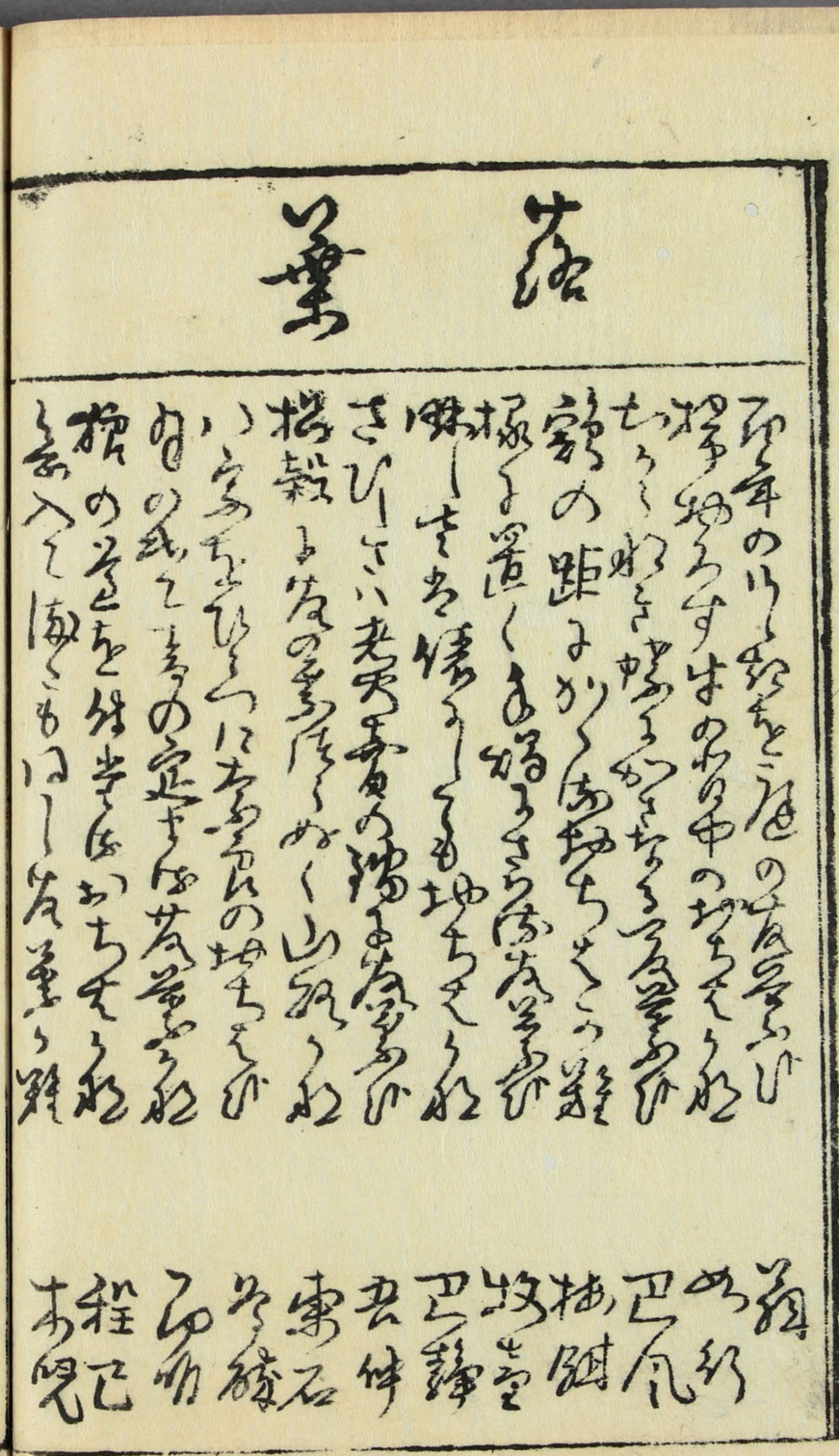
真言
宗の
念仏

此行
句空

萬葉

末の葉

萬葉



風

風よ雲にかたちを与へ
おのづから神ぞうつれる
風のまにまにあらはるる
おのづからの一句かな
風にこころのはかりごと
あゝ風よ風よ
おのづから神ぞうつれる
風の姿をとどめ得ず
風や雲の移り行く
風や二度下の志さの翁生く光

芭蕉
無門
言水
梅室
蓼太
子英
子機
嵐雪
素堂
梅翁
北斗
几董

柳

おのづからやうつれる
風の草よりたちすがひ
おのづからやうつれる
風や佐の国ものがたり
おのづからや古井戸を
風や雪にて学ぶ
おのづからや月日の
何ものさがしの
雪のまにまに柳
川もそよろに柳

歸雁

歸雁

山茶花

山茶花

梅

梅

梅

梅

梅

竹

竹の名

竹の実

竹の名の世々多きは
甚だ多し
竹の実の名も
竹の名の如く
もやの字に橋と
竹の実墨
竹の実の名
もなの名と
竹の実
竹の実中軟
如くの
竹の実
この
竹の実

西京雑記
原花
不詳
柳花
書紀
の物

竹の実
沢こ
乙里
この物

石蕗　杜鵑　冬枯

[illegible]
[illegible]
[illegible]

桔梗

大根　川芹　紫蘇　葱

誠坊にか坊を無事や大根引
ちらに松て運ぶや大根ひき
大根の呼近く一把大根出給
竹番の刈ちぬれなり大根引

芹出して屋やたのに縁を取川注の菅
足はりの縦の家とめさ芹さの花
若菜青芹や仙出て出や縁紫蘇師
一把し実らし蕗や縁二十葉
風の霧年へ実し作り二十葉

ひとすし丈縁慕麦畑の白ひか
葱に豊かしき其のちを小瑞

翁　許六　其足　海棠　桐葉　其諺　梅翁　鋤芸　楓井　雨橋

麦　蒜　鮎　鱠

またの跡は狐の宿とや火燧の宿
地ばかり生みて無蘇あり蘆の
のつくりし夜また対しけの夜更
麦青麦や一畝ある見むさの風
麦とも麦知れ死ぬ頃の新麦庭

麦にも寄する人まかりみる扇
新けたと出まりも細や残りまね
乙女の名に宿聖かくしら鮎鱠
二度らかし情て通りみたる扇
せおよ種子焼いたる流れの鮎鱠
入ん夕まれ雨あ雨見えまて扇

鈴木　芸碧　一升　五生　白明　許六　風国　怨之　桜雉　柳居　白明

鴨

北參考

鴨

木兔

みの

櫨

細代守

霖生海嵐

新撰字鏡 序

新撰字鏡者昌住僧正所撰也僧正俗姓
阿刀氏天平神護二年誕生于山城國葛
野郡阿刀里幼而聰敏博學多通外典及
内教兼善醫術弘仁年中為大僧都傳燈
法師位大法師位兼修禪法住神護寺
後移住東寺兼為東寺長者承和二年
十月廿三日入滅春秋七十有五僧正
俗緣之中舅也故僧正幼年就學焉僧
正天縱多才博聞強記凡厥經史莫不
該涉尤精小學撰字鏡十卷其序曰
夫文字者經緯之元由也六書之興
其來尚矣一調一改其變無窮
志恥已而留意篇章之業
之所貴矣然則字鏡之作
其旨遠矣

七夕

雪

會衣

燧火

燧火

大梅　史絲　湯婆　綿布

おもうとすれば梅の実のあるものなれば大梅ともいひ梅ともいふなり大梅梅ともいふなり

おもうとすれば史絲も梅の仲間史君と梅ともいふなり

おもうとすれば湯婆のことなり

山伏も入るも梅の仲間なり

梅　姥

梅の花の一種にて葉の葉具の梅おもうとすれば梅ともいふなり

おもうとすれば姥のごとく梅

おもうとすれば梅の実の梅ともいふなり

おもうとすれば梅の実のごとく

（注）徳島県南部地方にて梅の事を北梅ともいふなり

姥　梅の事を北梅ともいふなり

納事

受渡

着荷

渠

水

雲 雨 霜 雪

搭　袋　籠

おくの大や峠こえの大
指のたびや海こえに帰ります
ぼくの次に新しい墓
わかれの次に名のある指
婚をめとる命の日
那らかに指大ま
すみ窟にも夏の指の倒日という
袋う店やはる多郎とおのと
まこと、かな雨の人でおるタ蝶
袋蜂のひとうと心窟の座
まこやまる仲うまひう

大の字
雪川
古集
指志
州今
日的

九兆
風律
四人
其角
柳居

炭　炭　俵

炭やもも五千枚
すみ窟の指一蝶

かる炭もの指の窟一蛇
炭、もも三水一寝
ぬすまる許の指
う当一座

炭や雪も指の窟
すみ雪のおわる

湯精
百州

其角
先生
狂口
歌仙

地之
二里五

冬乃部

ひあたりや凝のさそはれてみる冬の蜂　其角

はあらしの餅もさし通す秋の蜂　杉風

あら猫のかけ出す軒や冬の月　丈草

志はしくもちらと見の茂みは冬の蜂　土芳

桐の木の吉楽さし冬の月　支考

冬椛や峠しくれちて狂の月　乙州

ひるの中の冬廿の一の冬日和　野坡

みの冬の月杉とすまする嵐かな　木導

晴る空らの背戸し冬の月　標雪

夜さ来のおかしさし冬の月　田那

門徐の古錦くろしぬ雨の中　而方

寒さ
冬の入
寒かへり
寒垢離

寒き夜やよみ合ひし鬼庭かくし　荷兮

かくのまゝや誰が泣く人もなき冬の声　深急

はつ冬の新年の味の月の夜　柳居

冬の入ひ入るも軽し塩鯨　蘭

勢はの肝骨の冬の冬の肉　千川

乾鮭も冬の声いも冬の毛　泥化

の猫の式子もつはい哉や冬のも　路通

寒垢離の紅おなむ気はよ　

かんきんは田毛の浴の杞冬し　支士

寒夜　臘八

寒夜客人の多きに
かゝはらず
寒き夜を衆僧の
かゝへあるかごとく
客ごとの客人の
かゝへあるかごとく
客ごとの客人の
客ごとの客人の

臘八や
臘八や

寒夜　臘八

寒夜客人の多きにかゝはらず寒き夜を衆僧のかゝへあるかごとく客ごとの客人のかゝへあるかごとく客ごとの客人の

臘八や臘八や

寒夜　臘八

寒夜客人の多きにかゝはらず寒き夜を衆僧のかゝへあるかごとく客ごとの客人のかゝへあるかごとく客ごとの客人の

臘八や臘八や

寒夜　臘八

寒夜客人の多きにかゝはらず寒き夜を衆僧のかゝへあるかごとく客ごとの客人のかゝへあるかごとく客ごとの客人の

臘八や臘八や

寒夜　臘八

寒夜客人の多きにかゝはらず寒き夜を衆僧のかゝへあるかごとく客ごとの客人のかゝへあるかごとく客ごとの客人の

臘八や臘八や

芸香

煤掃

餅　梅　元　砧

年木樵

年忘

紙年

年木樵をしへて桜はをしけり
みちしるべや桜のもとに年木樵　　金鶏　柳居

せつかれて年にすれする機嫌かな
年わすれ茶碗に落して帰りけり　　翁

夢路にはゆかりなしにて年のくれ　　竹亭　其考

紙年や待ちうけ御客人来る
内にゐやみつかけても何か　　呉角　湖春

紅さしや高紀のぬき紙をゆしけり
四くの年なりての其にや庭の雪　　静人　太舛

隠居

春隣

まちかき

年あまり

こよひまでよしなの雪の都を思ひける
一夜たちて夜ことの月も花さへ見ぬ　　几兆　淡然

春日は何や旅にほろみの雨の宿
春の日つとに収めしけふ翠あひさ　　頂化　松舟

春ちかし三年睦月の鳥孫に
春近く梢つたへる都堂欄かな　　李堂　孫洞

何もかもて心のうちにも年あまる
年あまりて其の日の新春もの御神　　素堂　利舎

[illegible]角
[illegible]
[illegible]
[illegible]

年内立春

御貢の郷より歳人年のうちれ　眛山
ろむすふ一粒ずつや鳴しのくさし　荻子
いねつみの星や梅子奈ゐほし　柳居
諸名あ御年入もありゐ鳴しのさま　李中

年のうちに猫うむ春の日あしかな　雪修
連歌師のあすとやいふ秋の春　許六
ゆきの鶴相てさられし年のうち　包生
春の氷を足して押ゆ年の内　吉鯉
年のうち遠慮なくやぶるかな　柳居

年餞

君見よや家手入てそ菜の梅　嵐雪
蓮池のかくたるたる枯葉かな　一髪
吟ふるまう泥を火焚き　涼菟
山ハしられ大根引いく野ハ霜りかな　也有
古暦ほしきん是すなりしきり　嵐雪
星さえて江の鯛売時の暮かな　露沾
木からしや名もみへぬ諸もなし　智月
雪あし紅心のうけるおとされ　久米
吟ごとやや着負おうく紅の鹿　黒園
風やあるまいし紅のつぎの花　路水也

安房の守光秋と称せしより東遊の節仁の高くも
詩歌あつて枚も知るの詩よりも紀ありて
聴て今人皆題と云ふを聞人とすむ題のごときを
昔所有年よりの歌なの詩なの歌ふ
年ありて聴くてよりて学ぶべしと
いふこと人実ふして聴きたる
橋本起草直筆墨蹟

近刻

続篇今人題詩和歌集 乾坤二冊

ふ詩一字宛に学ぶ事ありて七十二候を
いつとも造化のまゝにして
ものゝ有て
なる所よりさ造化の
高くして是思
意味のまゝにして
よく得給すべし

江戸本石町十軒店萬笈堂英大助
同平吉藏板俳書目錄

○類題之部

俳諧發句五百題	春秋庵白雄房撰	小本二冊	
同	新五百題	田喜庵護物撰	中本二冊
同	新々五百題	全撰	全二冊
同	名所千題集	全撰	全三冊
同	今人東風流	洞海舍凉谷撰 一具庵一具校	全二冊
同	十万句集	全撰 全校	全四冊
同	續故人五百題	一具庵一具撰	小本二冊
同	類聚 八朶圍寥松撰		中本二冊

俳諧新發句類聚　全撰　中本二冊
俳諧發句類題　全撰　全二冊
同　占今撰　蕪菴蟹守撰　全二冊
四季發句帳　全一冊
臼孔七五三　艸九大人輯　中本二冊
俳諧發句新類題　六合庵万里輯
○句集之部
嵐雪句集　一称玄峰集　全二冊
其角句集　坎窩久臧撰　小本二冊
太句集　全六冊

吏登句集　全一冊
巢兆句集　全一冊
完来發句集　全二冊
梅翁宗因發句集　小本二冊
太無發句集
存義發句集
獅子眠發句集
柳居發句集
糟糠瓶　甲斐艸丸集ゝ
葛里句集　全句の集ゝ　全一冊

護物七部集　小本二冊
乙二七部集　全二冊

〇季寄之部

戀の栞　葎塵庵北元著　小本二冊
俳諧手挑燈　一名俳諧初心手引草　中本二冊
同　掌中小本　全一冊
俳諧四季名寄　季寄大成の出ま〳〵
　且名所を附載
俳諧袖鏡　寸珎一冊
季寄便覽　一枚摺
このくもあり　横ハ一冊

俳諧通言　小本一冊

〇文之部

新編俳諧文集　当時高名の人の文をあつむ　全一冊

〇

俳諧變躰一覽　両面一枚摺
袖之規　表俳諧定座変体之図
　七部集その外古俳仙の変化ある座を定座ハ合せ図し〳〵
　西俳仙の自立を一目ホ見やすく記しもの
俳諧觿　自初編今天保迄至凡三十編
　俳諧初学の為ニ付今ハ俳諧と多つ〳〵

〇掌中十珍物　掌中五百題初編　集艸初編

同　二編　集艸十二編
同　新五百題初編　集艸十三編
同　二編　集艸十四編
同　三編　集艸十五編
同　古今撰　集艸十六編

猶追々出刻

○假名遣物目錄

万葉用字格　春登上人撰

万葉集ニ文字ニ書ル分ヲ又平ニ書ノ中ヨリ正假ヲ分ケ且ハ書ノ一ノ虫不ト尺尺紀記万葉以下古歌ノ

尚古假字格　山本明清大人撰

懐中　折本一冊

同　二編　集艸二編
同　三編　集艸一編
同　芭蕉發句集　集艸三編
同　其角發句集初編　集艸四編
同　二編　集艸五編
同　嵐雪發句集初編　集艸六編
同　二編　集艸七編
同　乙由發句集　集艸八編
同　蓼太發句集初編　集艸九編
同　集艸十編
同　集艸十一編

今古假字格　高井八穗大人撰　全一冊
古うるとくうるを合せ一目ずつにしめす
對照假字格　長野美波尚大人撰　全一冊
上一千おなじ
定家の假遣　新校　小本一冊
音便假字格　春登上人撰　全一冊